

|||||資料|||||

## リカード研究に関する最近のソビエト文献

見 野 貞 夫

最近、リカード研究が再燃してきた。マルクス経済学が伝統的にかなり当初から輸入されて前近代的遺物の批判＝克服の用具に、多少とも役だてられてきたわが国では、マルクスの先人者として、リカードは、当然のことながら、看過できないフィギュアだった。とりわけ、戦時中は、不幸なことに、マルクスを直接<sup>じか</sup>に論じえなかつたために、そのかくれみのとして、あるいはスミスを、あるいはリカードを研究することになり、スミス・リカードの姿をとったマルクス研究にうらうちされつつ、リカードの研究も、スミス研究と同様、かなり高い水準にあった。戦後、迂回＝屈折したマルクス論ともいべきスミス研究は、カモフラージュを強いられた堰<sup>せき</sup>をとり払って、怒涛のごとく貫流し、陽の目をみない年代の蓄積をばどっと放出した。世界に誇りうる第1級のスミス研究はこの結果であった。また、戦前および戦後を通じて、もともとマルクスを研究すべきはずの人びとから、かれらに加えられた括弧をはずして、研究のエネルギーはマルクスに向って直進した。これがスミス研究と同様、マルクス研究を世界に類<sup>な</sup>いきわめて高い水準のものたらしめた。だがしかし、戦時中に同じくかくれみのとして利用されたリカードは、スミスとマルクスの通過点となって、案外と研究不在の状態がつづいた。けっして絶対的な意味で研究不足というわけではないが、すくなくともスミスやマルクスに比較すると、その開拓のウエイトは、疑いもなく、いちぢるしく軽かった。いふなれば、スミスとマルクスの間をずばぬけた高さでつないでいる綱<sup>ケープル</sup>がリカードのところで低くたるんでいるように見えるリカード研究のこの状態は、他国ならずわが国の事情にもっぱら帰着する。が、この事情が一体何であるかは、スミス研究が何ゆえに世界を圧する高い水準にあるかを問う過程のなかで、この回答に附随する消極的な側面として、確定されるであろう。ここではそれをつぶさに検討する余裕はないが、リカード研究の論文を紹介するにさきだち、この文脈で次のことをいうにとどめておきたい。

市民社会の論理を確定し、実際の方向づけを処方したスミス理論は、多分に封建的遺制をのこしつつも、外圧をキッカケに資本の軌道を歩みはじめたわが国には、スミスに重商主義批判を主張せしめたのと同じの重みをもつ前近代的状態があった。が、その場合、スミスがふみとどまった立場だけからではなく、これをふみこえつつみこんで、資本主義の危機意識からも、スミス理論は、アップ・トゥ・デートにいく重にもふくらまされながら、研究されてきた。この方向は、マルクス研究のかくれみのだったことから、多少とも必然づけられていた。スミス研究がはじめから資本主義批判（マルクスの視点）の形態で開始されたところ

ろに、科学的にその高い水準を保障したわけである。が、その批判の材料なり対象はわが国の後発性にある。後発性と批判のラディカリズムの密着する史例の一つがここにもある。

ところで、スミス理解の高い水準はマルクス研究のふかい状態をも、すくなくとも他国にくらべてずっと高い問題意識につらぬかれた研究をも、育てずにはおかなかった。けだし、マルクスはスミスの完結であり、徹底的な検討の所産であり、スミスのスミスらしい展開の結晶だからだ。スミスとマルクスの兩人とも、資本の入口と出口の相異はあっても、その時点でともに旧秩序の消去と新社会育成の客観的なロジックを指摘し、その実際的な定着を力強く処方した科学の使徒である。潰滅と生育が重なり合い相互に交差する歴史の激動期にあって、それをうつしとった理論は、新旧いれ乱れる現段階にもけって無関係ではない。問題意識の有無、程度の差はあっても、研究が疾風狂乱の現代にひきつけられているかぎり、静的均衡と無運動を主として研究対象としたとして、その欠陥が指摘されるところのリカード理論を、多少とも放置する結果となったのは、けだしありうることであろう。

しかし、リカード研究ならびにその精力的な検討が再生した理由はそもそも、どういう点にあるのだろうか。大まかにいって、それは、スミスやマルクスのすばらしい研究が発足したのと共通の地平つまりアクチュアリティに富む現代の問題意識をほかにしては、ちょっと考えられない。スミスやマルクスを今日の動乱時代に結びつけて再解釈したり、あるいはその視点をよみこんで現代経済理論をゆたかにするはてることなき反復作業のなかで、たとえばスミス理論の市民社会論的有效性と、真実の科学的実効性の明確な区別とともに、両者を統一し実践と科学を現代として結合するいま一つのスミス視点も開発されつつある。否、開発の前に、定着をとげつつあったといったほうが適切であろう。これは高かったスミス・マルクス研究を、更にいやが上にも高くした。その効果はこれにつかない。これはリカード研究をも例外としない。リカードがかなり放置のうき日にあったのは、スミス解釈の最後の視角が確定できなかったためであり、この視角からいえば、相対的に低いスミス研究のせいだったことになる。リカードが研究されなかったのは、スミスが完全に研究されなかったことによる。この最後の視角は、現代資本主義が当面している公害に特有な、すくなくともふかいかかわり合いをもつ社会的費用論とか外部経済論、国家の経済規制といった問題を、スミスにも同様、リカードにも、的中させ確定し再考させるはずである。この問題は、いまはやりのPublic Economics が主としてとりあげる諸論域である。この論域をつつみこむ視角からとらえなおすときに生じてくる市民社会論的有效性の再生がほかでもなく、社会主義経済の理論的(生理学的)把握であり、科学的実効性の再生としては、価値・剰余価値論をのりこえた、あるいは再逆転した費用・共同剰余論と考えられる。市民社会が価値・剰余価値論に集約されるように、費用・共同剰余は社会主義経済関係の理論的抽象であり、固有な範疇である。スミス解釈にあった市民社会的有効性と科学的実効性のくいちがいなり、分散はここで消失し、新しい現代の地平で問題が再現する。この視角をスミスにもマルクスにもよみこもうというのであり、そうするとリカードにも同じく、こうよみこまざるをえなくなるというわけである。リカードをとりあげてスミスやマルクスと同じ重みと厚さで研究することは、後の二人を、従来とは相異った仕方でいまいちど再解釈させることと同時相関的であら

う。リカード研究ともども、初期マルクスの研究が盛況をきわめるのも、その同一ラインに立つ事情の一角と考えると間違いはあるまい。

マルクスの再解釈について、いまの問題に関連して、指摘しておけばこうである。マルクスは、ビジョンなりパースペクティブを、この視角にふさわしいものにしたにすぎず、経済学としてはこの視角の展開を与えているわけではない。マルクス作品のこの緊張した位置づけとともに、そのビジョンを経済学の範疇として展開し理論的に再構成する将来の作業課題の解決が強力に意識される。『資本論』が行使した経済学の概念として、マルクスのパースペクティブを、科学理論的に展開・叙述する作業！『資本論』は、ビジョンを大きく背後にひそめるものの、科学理論としておこなったことはせまく、前史社会、その集約としても資本主義社会の生成発展とその内的傾向の分析だけであった。これ以上のことは、一見そうみえないが、何もやっていない。だから、マルクスに、社会主義経済の理論構成や革命のロジックを求めるのは、ある意味でないものねだりであり、確実にかれをオーバークラッシュさせること——これをこそ現代経済学の作業課題である。

同一視角を、リカードに及ぼしうるはずだし、及ぼさざるをえないし、実際、及んでいるように思う。ただ、マルクスの場合には、視角と検証材料が同一方向であるが、広いスペースと特定の地点のくいちがった相互関係が目映じてくるにすぎないが、スミスやリカードの場合には、この視角のよみこみは、かれらの理論材料の逆転性を鮮明にさせるとともに、それを通してこの時代の座標をも確定するだろう。

スミス、リカード、マルクスそして現代の科学的系譜の経済学者のラインは、それが社会発展のバネをとらえているという意味で科学的というかぎり、とりも直さず、経済的基礎過程の発展と連続の客観的な内的発展の論理を観念として再生したものである。それだからこそ、現代的視角をスミスにふきこんで、これをふくらませたスミスの再現は、科学の軌道として同一ラインにあるリカードをもけって例外として隅におかない。スミスをことごとく理解することはリカードをも完全に理解させるし、リカードへのアンバランスな研究力点の不在をも是正するはずだ。けだし、この視角こそ普通的批判の立場であり、経済学批判の立場であるから、この視角に照射されてはねかえってくるリカードの映像は、スミスやマルクスとちがい、その安定したかなり平和時代を反映して、激動の収斂を集約したり、それを準備する内的過程のロジックとして再把握できるかも知れない。スミスにかぎらず、リカードの理論構造、範疇の組立てなどが逆転した性格をおびているのはいはずと知れて決まりきったことであろう。それにかかわらず、これを自覚してなお、費用・共同剰余の範疇を注入するとき、スミスは逆転した共同剰余論に、リカードに逆転した費用論として、ふくらませて再解釈できるように思える。これはほかのところでも述べたことがある。そうした解釈がスミスにくらべてやや見劣りのするリカード研究を、スミスをもいっそう高める構造でバランスする。たしかに、直接に、リカード研究の相対的軽さを是正する緊迫した意識も、かれに向わしめる大切な動因として、一つの見識たるを失わぬのであるけれども、それは、所詮、主体的なモチベーションである。そのモチベーションなり是正意識を支える客観的要因

は現代への洞察であり、スミス・マルクスをも高める洞察である。また、リカード研究再興の理由として、今日、学会でも、ここ2、3年一つの特集報告をなしている近代経済学生誕百年祭に刺激されて、弁護論に対決する科学的系譜の自己確証という意味もないとはいえない。経済学史上、限界革命の勃発から数えての百年とするようだ。しかしこうした外生的理由からよりも、マルクスやスミスの研究水準にくらべて、何といっても見劣りのするリカード研究の現状を是正する必要性として意識される姿をそもそも、発現させる内生的原因の確定が大切である。その原因こそ現代の新しい統一的な視角の開発、これを育てた、資本をのりこえる社会諸関係の定着である。

現代の視角といっても、もとよりそれは各国のいま当面している個別的利害の状態ではない。歴史の太い流れにそった一つの抗しがたい方向なり現象をつかみだしこれを方法意識に高めることがまさに、視角開発の内容である。端的にいえば、それは社会主義諸関係の把握と分析にもとづく。だが、その視角を直接、古典によみこむとしても、ここにでてくるのはAが $x$ であるのは、Bが $y$ であるのとちょうど、同じだといった比例話とか、当らずといえども遠からずのアナロジーが精々のところであろう。これを防止し、視角と照射材料の積極的な接触を確保するには、将来に方向づけられたこうした諸関係にかかわるとはいえ、漠然としたコトバや概念ではなく、その凝縮ともいべき範疇をもって視角を代表させねばならない。範疇はわれわれが生きている現代の性格のみならず、旧社会と質的に区別される異質なものであるから、その検証＝識別の仕方は、同方向ならず異方向、同一土俵内部の批判ではなく、土俵の外にでた逆転した性格を極度に意識させる批判であろう。ただ、マルクスでは、スミス・リカードと同じ諸関係を叙述しながらも、すでにこの逆転性が意識され一つの確固たる方法的自覚にまで高まっているから、逆転性格の批判を予めくちいてしまっている。が、個々の理論局面や史実認識でも一切の批判からまぬがれうる無謬だというわけではない。スミス・リカードともども、やはり時代の子であるはず。また、そう考えるのが科学たるのメリット。逆転性格をもった史実や概念を逆転批判の視角からアタックし、両者のするどい二者闘争的な相互関係を緊張して自覚しているのがマルクスだったとするならば、スミスやリカードでは、こうした自覚が欠落し、更には二者がごっちゃになっている。これはしぼられたところでは、理論の組み方、概念の把握の、大きく広いところでは資本主義への態度の相異につらなる。リカードやスミスの理論に逆転が鮮明になったからといって、両人が一樣になるわけではなく、その内部で両人の理論の前進度なり歴史の位置を判定するのを何ら妨げない。リカードでは、スミスではこぶとして価値とパラレルにあった分業労働や節約の利益はすべて価値に吸いとられ、価値を確定している。むしろ、節約は、価値の外でこれに向う構造ではなく、逆に価値の内部でその外に脱出する構造で位置づけられている。しかし価値の専制支配を永遠の自然秩序と考えている点では、両人すこしのちがいはない。私有の完結、ブルジョア生産の満開、前史のクライマックスがリカード理論から匂ってくる。それに視角と材料の二者闘争性をよみこむ場合、逆転した費用論（価値論の現代的に批判的な仮の名称）ということになるだろう。

リカード研究がおこなわれるべくして、おこなわれていたちょうどその矢先、昨1972年は

リカード生誕2百年(1772~1823)にあたる。これを記念して、ソ連でもリカードに関する論文がかかれた。しかしわたくしのみたかぎりでは、特定の論点意識をもってつらぬかれた専門的研究にはとぼしいようである。雑誌論文に限定し、しかもこの中から二つばかりを以下、紹介してみよう。この内容も、古典的に剰余価値論の視点をのりこえていないし、リカードに関するマルクス文節が多くひき合いにだされるほかに、大して新鮮味があるとは見えない。あまりにも古典的ともいうべく、現代的な論調ではない。現代にひきつけたとしても、一つの時論の域をでず、たとえば、現代資本主義の国際的な為替危機とか、社会主義国内の国際分業論を、リカードの貨幣理論や比較生産費に結びつけて考えようとするだけで、トータルな再解釈がはまりこむ一般的な問題意識とはおよそ無縁のようである。その二つの論文とは、

А. Аникци : Давид Рикардо — классик политической экономии, Вопросы Экономии, No. 41972.

Ф. Я. Полянский : Д. Рикардо — классик научной этапа буржуазной политической экономии, Вестник Московского Университета, No. 6 1972.

である。これでその国の理論・研究の水準が分明になるわけではないが、けっして高いとはいえない難い経済学の水準を示した一角がここにあるようにみえる。リカード研究をスミス研究の水準に高めるべく、わが国でそのように課せられた任務遂行のなかでは、これは、よかれあしかれ、一つの他山の石とはなろう。

\*

\*

\*

世界の経済科学がこととして、リカード生誕2百年を記念するのだとして、その限界をまつわせた偉大な理論科学的メリットをアニキンひろく論じている。リカードの学説は、かれによると、はじめからそして、マルクスが科学的理論を与えてこのかた、というものは、とくにイデオロギー闘争の対象となってきた。リカードの見解は歴史の遺産(ДОСТОЯНИЕ ИСТОРИИ)であるにとどまらないで、一世紀半を隔てた現在でも、その意義を失わない。

リカードはブルジョア古典経済学システムの完全な表現であり、その発端は遠くW・ペティにあるが、ブルジョア秩序の発展する内的合則性をともかく首尾よく認識したのが古典経済学であった。「リカードの重要な功績は経済学における科学的研究方法の開発であった。」リカードの筆下から、「新しい経済科学が成立したのだと同時代人は論じたが、これはある意味で正しく、かれの作品において、経済学ははじめて、経済的基礎に関する知識体系としての科学の特質をいちぢるしくもつにいたった」。どのような生産・分配の方法が社会の物的増加に最大限に貢献するかといった——経済学をつねに動揺させる問題に、かれは何とか答を与えようとした。そしてこの見解は今日でもその意義を通用せしめる。「リカードの理論的見解がとくにきわだっている点といえば、経済的現実の多くのさまざまな要因一切を科学的に論ずるさいに基礎となるはずの単一の一般的概念が存在するという意味における——その一元論(МОНИЗМ)であった。折衷主義や、内容空虚な複元論(ПЮРАЛИЗМ)はまったく古くさくなつたわけではないが、リカードの立場ではない。スミスにつづいてリカードは、経済を複雑なシステムとして研究し、基本的均衡条件を確定しようとした。このことはほか

でもなく、経済には客観的法則が内在し、支配傾向としてその法則作用を保障するメカニズムが存在することを、かれが確信していたことをば意味する。こうした自己規制論は、理論的にも実際上でも、意義が大きい。またかれの作品は、貨幣流通、信用、国際経済関係、課税などの具体的な問題領域でも大きな役割をはたした。わけでも、地代論と国際分業論には、経済思想の宝庫 (Золотой фонд экономической мысли) ともいえる見解がある。深遠百理論家 (глубокий теоретик) にして、独創的論客そして有能な著者 (искусный полемист и талантливый публист) だったリカードは、自国に当時まつわっていた社会経済問題に、敬服に価する科学的使命感の高い原則をもってたち向い、科学には、私心を忘れて、勇敢に従うかれの面目を遺憾なく示した。

そのリカードにマルクスが下した高い評価は周知のところであるが、その判断はかれの勇断、深い知性、科学的寄与、原則性、先進性にあった。社会科学の発展においてリカードがもつ意義を、マルクスは二つの契機においてみた。第1に、ブルジョア社会を生理学的に理解するために、労働時間による価値決定を起点としながら、これをほかのすべての範疇や現象と比較した点。第2、諸階級の経済的利害対立を鮮明にし、史的発展の根基にしたけれど、他面、それには心から共感し、産業革命の進展のもとで工場奴隷制のおどろくべきいきよいを観察したものの、労働者階級の史的役割をみとめずに終った。また労働者側からの抵抗がないかのように、かれらの状態変化のいかなる可能性をも考えず、賃金鉄則→階級闘争の徒勞→宿命的な賃金最小限といった見解も表明した。

ひきつづき、アニキンにしたがえば、マルクスのリカード批判は、かれがブルジョア経済学者であったからではなく、客観的にそれ以外のものたりえない、科学的見解のなかでのかれの動揺にあった。経済学者という職業が存在しないリカードの時代では、かれのひたむきな科学への志向 (путь в науку) は異常であり、同時代人をあきれさせた。このあたりの事情を描写して、リカード研究家の一人のいうには、1821年、一人のイギリス人にして、アカデミー出身者でなく、わずらわしい実業社会の<sup>ザ</sup>見識をもった人が、ヨーロッパの科学思想が何世紀半の間、おしすすめなかったことをやりとげたのはそもそも可能なことだったろうか、と反問している (M. Blaug: Ricardian Economics, a historical study, New Haven 1958, p.V)。『経済学原理』をだした1817年頃には、かれの遺産はほぼ百万ポンド。イギリスのみならず、歴代の経済学者中、もっとも富裕だった。この膨大な資産を、かれは有価証券の売買で稼いだ。有力銀行家——富裕な地主——大土地所有者——国会議員——これがかれの外的年譜。科学では、当時の先進的階級であった産業資本を代弁した。この立場は、かれをしてほかのすべてを古典経済学者と同様、ふかく経済を分析せしめて、政治的には、ブルジョア自由主義の左翼を形成することとなった。この政治的立場は1819~23年の議会活動で鮮明になった。

マルクス以後、非マルクス経済学におけるリカード学説の処遇はかなり複雑である。リカードの確立と崩壊の段階だった19世紀末までの年代は、マルクスも一つの立場から、部分的に共有して研究したが、もう一つの立場では研究の仕方は相異となっていた。すなわち、ここではすくなくとも、コトバのうえではすべて調子よく、リカードの諸規定はそのまま採用

するが、しかしその内容は、識別しがたいまでに、まったく変造された。経済現象を説明する基礎としての労働価値説や利潤の擷取性格はほねぬきになった。それは価値論とか分配論にある。これは前世紀中期および末期のミル (J. S. Mill) やマーシャル (A. Marshall) にみとめられる。次に、主観価値説の登場によって、リカードは全面的否定の方向をたどっていく。その否定をしめくくる人として、ジェボンス (J. S. Jevons) がいた。有能ではあるが考えの誤ったリカードが経済学の車輪を正しくない方向にむけてしまったと、リカード非難を公然とやってのけたあのジェボンス (J. H. Hollander: David Ricardo, a century estimate, Baltimore 1910)。この場合、ジェボンスの念頭にあったのはリカードの価値論や分配論である。最後のものには、剰余価値論のめばえすらあった。次の年代では、時代も経過し条件もちがうのだが、ケインズもリカードを批判した。ジェボンスの口吻を真似たかのように、マルサス理論の支配しなかったことを口惜しがり、そうになっていたならば、経済学はいまよりもずっと、進歩していたにちがいないと残念がった (J. M. Keynes: Essay in Biography, London 1933)。だがしかし、批判の論域はすでに価値論・分配論ならず、蓄積重視と有効需要論の、一般的過剰生産や恐慌の存否をめぐる対立を内蔵する再生産論であり、直接の批判材料はセイ理論に立却したリカードの見解であった。セイ理論に対決して、リカードとは反対の立場にマルサスはあった。そして現代のリカード評価はどうかといえば、科学的功績にたいする外観上の同感と事実上の無視である。同感を表示するものとして、ケインズの発案によっておこなわれた50年代の全10巻のリカード全集が考えられる。しかしそれをすぐ黙殺。こうした立場をシュムペータが代表する (J. A. Schumpeter: A History of Economic Analysis, New York 1954)。そこでシュムペータは、マルクスはリカードの弟子であり、両者は大してちがわぬといった。これは印象的であるが、両人の科学論上の関係をねじまげるものであり、マルクスが経済学に注ぎこんだ革命的転換を頭から度外視するもので、とうてい正しい評定とはいえない。

なおまた、リカードには、もう一つの側面から吸収される評価として、社会主義思想の成立に与えた影響も看過することはできない。19世紀の20~40年代では、社会主義は空想的であった。その後、イギリス社会主義は、この理論的基礎づけとして、リカード経済学をもつようになった。当時、労働者の立場をあたうるかぎり代弁表明するふかい思想家は、リカード学説中に、反資本主義的傾向たとえば不払労働 (=剰余価値) をよみとっていた。

ほかの社会問題と同様、リカード学説も、その時代の具体的条件や階級状況と結びつけて検討する必要があるだろう。そうすると、かかれたリカード論は、その意義を失うものが多く、直接には科学的重みはなくなり、時代の記念碑として残るだけであろう。だが、リカード体系中、重要なのは、利潤率・資本蓄積の傾向、資本にとってその傾向がもつ意味である。マルサスの人口論や遡減法則を前提とするリカードは、劣等地に志向する耕作、農産物の価格騰貴がさげられないと考えた。賃金が最低限の生活手段や物理高で決定される以上、それはあがらざるをえない。産業資本家は、商品価格を高めえないから、当然 (名目および実質上の) 地代増加と、(名目だけの) 賃金上昇との間に、はさまれた利潤は、相対的に、おそらく絶対的にも低落するにちがいない。そのために生じる蓄積不足つまり利潤率低下と蓄積欲

の減退から、資本主義はおびやかされることになる。リカードは見通した。この見解からすれば、資本の暮掘人となるのは、国民所得のますます大きな部分を地代として吸収する地主である。

利潤率低下をあやまった前提から推論し、農業技術の改善、経営の合理化などの反対要因を考慮せず、たしかに穀物法反対の闘士だったとはいえ、リカードは、国際分業や輸入による廉価化を過少評価するきらいがあった。だが、こうした要因こそ、かれには考えも及ばなかった工業部門の資本蓄積を可能にし、生産因として土地のウェイトを低め、そしてつまるゝところ地主の社会経済的地位を転落させていったのである。

現代経済学からみて、リカードの遺産中、もっとも本質的なものは何かを自問して、アニキンは以下のようにいう。いうまでもなく、これはリカード研究の最重要な問題であり、科学的な検討を待たれるのであるが、簡単にいって、基本的にはこうである。すなわち、リカードの役割がとくに大きかったのは、経済学の対象と方法の規定とか、理論構成の方法的開発とかにおいてである。この領域でも、価値論におとらず、主観説が新たに反論を加えた。経済学の対象とは、リカードによると、階級関係を形成する生産関係であり、その階級関係は、生産過程のなかでの人びとの状態や生産手段との関係とともにある。こうした問題をとぎすまし、生産物分配法則を研究対象としたリカードは、経済学の基本的研究方法——つまり科学的抽象法を確立し発展させた。かれはある意味で、精密科学で用いられる方法を経済学でも適用しようとする。そしてこの方法は科学的演繹に立却する。つまり、いくつかの簡単な基本的規定を定式化して、かれは複雑な合則性を展開しようとした。これと関連して、またリカード理論の「数理的精神」はすでに、数理学派の先覚者クールノがみぬいている。それによると、経済学の文献で純粋に文学的なスタイルの色合いをもっていた人にスマスやセイがある。が、リカードなどはもう一つのグループであり、かれらは、抽象的に問題を論じ、最大の精確を期すべく、代数学をさげず、それを算数で明らかにしているだけである(A. Cournot: *Recherches sur les Principes Mathématique de la Théorie des Richesses*, Paris 1838, p. IX.)。したがって、経済量数の関係もリカードは与えた。これはたしかに、かれの長所ではあるが、長所ゆえに、リカードらしい長所ゆえに、マルクスのいうように、重大な弱点もち合わせる。すなわち、価値や分配の大いさを量的にのみ一面だけ分析して、ブルジョア生産そのものの性格規定が結びついている質的アスペクトを、どうでもよいものであるかのように過少評価してしまったのである。

リカードの中心問題は、価値と分配の問題、つまり商品価格の最終の基礎ならびにその価格をもって階級代表者の所得分前を決定する法則とは何かの問題であった。労働価値説を基礎にすえて、かれは明確に、この場合、発生する諸問題を表示した。資本、すなわち、特定階級に属する生産手段の役割を解明すること——この困難はさまざまな形態をとったが、とくに価値生産と使用価値生産の両者における有機的構成の差異や資本回転のちがいが商品価格や利潤率に与える影響の問題と形であられる。資本は生産過程に関与するけれども、価値はつくりださない。この問題をこうもひきだしたのはリカードの功績に属し、経済思想発展において重要な役割を果たした。資本制生産の条件のもとでは、価値問題をリカードが徹底して

解決できなかった理由は、マルクスもいったように、商品に伏在する労働の二重性を考えなかったことにある。一般的に、資本主義社会への静態的なアプローチ、動学的理解の欠落、基本的に大いさ不変の国民所得を分前として分配するという考え方。それは誤論であるが、実際の経済過程の研究をも限界づけた。このことはリカードに特徴的な——社会・経済の発展にたいする史的思考の欠如と関連しており、資本主義が永遠の社会秩序で法則も永久にして不易であり、いかに発生したかには無関心にして、何をこれからやらねばならないかを不問に付す態度である。だが、資本〔関係〕は、どんな社会にも内在する生産手段がおびる物的形態ではなくして、特殊な変化する社会形態にすぎない。

価格と賃金の相互関係に労働価値説を適用して、リカードは次のように結論する。賃金の変化は、他の条件にして等しいかぎり、商品価格に影響を与えず、価値にもそうである。ただ、付加価値が分割される利潤と賃金の比に変化がおこるだけである。したがって、競争のもと、賃金増加の結果としてでてくるのは、価格騰貴ならず、利潤減少である。このあたりの理解は政治性格をもち、階級闘争とも結びついていた。この点でマルクスは、リカードに立却して労働運動に有害な立場と対決したが、根柢となるその規定は重要である。けだし、価格騰貴——インフレーションの原因を賃金上昇に求める現代ブルジョア見解に真向から衝突するからだ。たしかに、マルクスやリカードは、現在すでにないか、あるいは変化してしまった条件が存在するところで発言した。その条件は、まず第1に、個別企業者が市場価格に何か影響を与える可能性を排する競争、第2には、金本位にもとづく貨幣流通の安定性。これでは価格があがっても、信用貨幣量が適合して収縮する。だがしかし、現代資本主義においては、市場や価格をコントロールする独占の支配が特徴的であり、貨幣や信用は増加のほうにのみ一方的に弾力的であるから、賃金があがると、これを価格騰貴に転嫁する。とはいえ、転嫁は無限ではなく、市場の独占度やその他の要因によって、程度が定まる。独占により賃金上昇を理由に正当化される価格騰貴は現代インフレーションの原因であって、これに経済学者は無関心ではない。

貨幣とその流通に関する問題は、リカードが文献活動をはじめのキッカケになった最初の課題であり、19世紀はじめに生じた具体的な状態つまりイングランド銀行の兌換停止と金属減価、商品価値の独自の運動などとじかに関連する。この論点について、リカードの二面性を、マルクスは指摘する。一つには、労働価値説にもとづく貨幣理論の構成、二つには、かれの価値論とはもともと適合しない貨幣数量説の立場。リカードのこの理論は、19世紀前半の経済政策の基礎におかれたが、その政策は信用恐慌や経済恐慌を促進していった。たとえば、恐慌時に、金価格を高め金を国内にもたすべく、貨幣量を収縮するなど。また経済学の展開部門、貨幣銀行業、価格運動の多面的にして具体的な研究でも、リカードの貨幣理論の意義は大きく、これを、マルクスは、19世紀前半のイギリス経済学の功績だと評価した。リカード以後、いくつかの問題——つまり貨幣需要決定要因、貨幣流通速度、紙幣——金兌換の役割と形態、国際間の貨幣の役目などが生じた。最後の項目は、現代の為替危機からも興味ぶかいものがある。リカードの関心は、各国の価格水準の差異が貿易収支に影響を与えるのは一体いかなるものであり、また逆に世界貨幣の流出入が価格水準にどんな影響を及ぼ

すかの問題であった。貨幣システムや世界貨幣としての貴金属の役割にして、その当時から後に生じた変化にもかかわらず、この二つの問題は今でも意義をもちつづける。一方の活動はアメリカの赤字についての議論にかかわり、それがみとめられる。後者は、西独の経験と、短期資金の流入にもとづく金ドルリザーブの法外な過剰に関連している。

リカードの国際経済問題研究はきわだっており、イギリスにとって大変に重要であったことを、これは反映している。とりわけ、注目してよいのは比較生産費の原理であり、今日でもその理論的効力は失われていない。労働価値説にもとづくこの理論は、国際分業と外国貿易の経済的利益を抽象的に立証するが、この抽象的形態は何も資本主義だけに結びつくわけではない。最近、社会主義諸国でも国際分業が問題になり、マルクス学者の注目をひいている。リカードの科学的業跡を高く評価することは、時の経過とともに、これが反動的目的のための手段たるを何ら排除しないし、発展途上諸国の工業化をゆるやかにすべしといった見解に顔をだす。このほか、リカードのもとでは現代でも効力を失わぬ理論的見解が多い。これはかれの見解に科学的価値が内在する最良の証明である。経済学でリカードがクラシックであるのは、同時代の哲学者ヘーゲルが哲学でそうなのとちょうど同じ。ヘーゲルの知識ともども、リカードの知識なくしては、マルクスをふかく理解するのはむづかしい。

ポリヤンスキーも、リカードを、現代経済学のある方にひきつけて評価を加えようとする。かれによれば、ブルジョア弁護論は、リカードの方法や見解を否定して、これを新古典学派の議論と対置する。以下、評者にしたがって、その論ずるところを紹述しよう。

経済学の理論的成熟はリカードの名前と直結しており、ペティ、ケネーそしてスミスをつらねた科学としてのブルジョア経済学の完結がこのリカードに存する。成熟なり完結の内容はといえば、最良の伝統、科学的ひたむきさの体現、マルクス経済学成立の起点である。実際、リカードにおいてブルジョア科学的経済学は、その「のりこえられない限界に到達した」（『資本論』第2版（1873年あとがき〔長谷部訳〕）。これにマルクスやレーニンも惜しげもなく高い評価を与えたのである。「その古典経済学、…その最後の偉大な代表者たるリカードは、階級的利害の・すなわち労賃と利潤との・利潤の地代との・対立をば、素朴にも社会的な自然法則と解することにより、ついに意識的に、かれの諸研究の軸心たらしめている。資本制生産方法の史的制限をほのかに感じているものの、その矛盾を永劫の自然法則と考えてしまった。だが、科学性格ゆえに、「リカードの理論は…すでにブルジョア経済にたいする攻撃の武器としても役立っている」のだった。19世紀の第2四半紀には、経済恐慌（1825年）や階級闘争の激化とともに、「それはブルジョア経済学の葬鏡を鳴らした。いまや問題なのは、もはや、この定理が正しいかあの定理が正しいかということではなくて、それが資本にとって有益か有害か、好都合か不都合か…ということであった。私心のない研究の代りに欲得づくの論難攻撃があらわれ、とらわれない科学的研究の代りに心やましく意図あしき論弁があらわれた」（前掲書全）こうしてマルクスは、俗流弁護論と、ブルジョア諸関係の科学的解析としてのリカードを対置する。何ゆえにリカードが科学的かといえば、マルクスによると、現象の内的関連を理解しようとしたからである。が、俗流経済学はこれに反して、退屈でペダンティックな表象叙述、この生産方法の担い手のもとでさけがたく生じる外観記

述に終始したからだ。

レーニンも、リカードは仮借のなく公然と、ブルジョア社会の観察と研究から、すべての結論をひきだしたのだと特徴づけた（『ローマン主義経済学批判によせて』）。

ポリャンスキーによると、リカードの作品がきわだつ科学的メリットは、なるほどブルジョア視界に埋没するとはいえ、分析の斬新性、きびしい首尾一貫性、最初の規定を系統的に展開すること、科学的真理への志向、客観的経済法則の探究、社会問題を提起する勇敢さ、いちぢるしく透徹した議論などである。主著『原理』では価値論から展開しているが、その場合、かれは、スミスばりの議論を批判し、自分の見解を一貫して主張し通した。価値の源泉をスミスが規定したのは正しいとしても、その量的表現にさいして、あるいは投下説を、あるいは市場における支配量をもってするのは正しくないとして、リカードは前者を自分のものと採用する。また、スミスは不変の価値尺度を求めたが、この探索をリカードは、幼稚なこころみとしてしりぞけ、スミスが考えた金・穀物も所詮は変動をまぬがれないことを体系的に明らかにした。更に、スミスは重農主義に譲歩して、土地に生産性をみとめて、労働価値説を犠牲にした。リカードは、先人のこういう論説をのぞき、注意ぶかく、価値と富の差異ともども、使用価値と交換価値の区別をも徹底的に研究したのである。使用価値は交換に必要であるが、その量的比率を決定しないから、それを決定するのは、豊かさではなく生産の難易であると考えて、富や使用価値と価値を区別し、価値はそれが表示される富の大小とはまったく無関係であり、むしろ逆関係に立つ場合もあるという。両者をごっちゃにする見解のなかに、リカードは経済学に多くある誤論をみる。富、効用、価値をことごとく同一視するセイ。空気、太陽、大気が価値をつくりだすと考えるセイ。リカードは正当にも、自然要因は、商品に使用価値を与えるけれども、交換価値は附与しないという。リカードはまた、価値と価格を分離し、価格を価値の貨幣的表現だとした。さまざまな偶然の要因が作用するもつで、市場価格の日常の変動は当惑させない。その変動の背後にリカードは執拗にも、価格形成の経済法則をさがそうとした。この方向は、かれを幼稚な需要供給説からのがれさせ、スミスにつづいて、市場価格に、変動の中心、終局限界としての自然価格を、まずもって対置させた。しかしリカードはこれで満足せず、更に、自然価格を、スミスがおこなったように、所得からひきだすことを拒否して、自然価格の背後に所得源泉としての価値を確定して、スミスを克服したのである。

種々な質の労働がうけとる報酬の大小は相対的な価値変化の原因でない。すべて労働だけがひとしく価値の基礎だと考えて、リカードは、労働の支出大小が価値の大小を決定するといった見解を、終始一貫、主張しつづけたのである。その主張からは、賃金と利潤の分配比がどのようなものであれ、価値は依然そのまま不変である。自然価格の範囲内に利潤率をはめるとはいえ、利潤に価値実現の形態だけを見てとり、価格形成因としての利潤を第2義的な表象として、スミスの俗流的結論をさけた。ともかく、価格運動の第1の基礎を、価値法則のなかにかれは求めた。が、価格が規制される交換価値やその法則を検討するさいに、その量的増加が人間労働によって可能な商品だけを、そして競争の法則が妨げられぬ生産領域の商品だけを念頭に置く必要があると、リカードはいう。このアプローチは方法的に大切。

リカードは、ボエーム (E. v. Böhm-Bawerk) が土地・株式…などすべての項目について単一の価格を形成する方法をさがし、これを消費者の主観的欲望の中に発見したような理論的手品を封じる科学的な提起をば、価値問題に与えたわけである。正常に大量生産できる商品にかかわって、合則的な一定比でおこなわれる交換を特徴づけるにあたり、リカードは、主観論者が市場の全能支配者として描きだす消費者を立去らせるのだ。価値決定の最後のコトバが生産外にあるとリカードは説得的に明かにしようとするが、かれによると、利潤のすくない部門から多い部門への移動という資本家の衝動は、市場価格を長くそのままにとどめず、自然価格よりあるいは低く、あるいは高くする。マルサスの『経済学原理』にかきこんだリカードの評注のなかで、競争のない場合には、交換比は、人びとの欲求なり、これに与える評価なりだけに依存するはずだが、競争者が何百とあるところでは、あてはまらず、価格は、販売者間の競争によって定まり、自然価格の水準またはこの付近に定着すると、かれはいう。かれが強調したいのは、生産費が決定的意義をもつのであって、主観的体験や消費者の欲求ではないという点である。

リカードの功績としてあげられるのは、商品生産そして資本主義の一切の問題を解決するのに、価値論がその基礎だとみとめたことである。価値論を理論システムの基礎として、そのシステムに整合性を与える作法はリカード理論の長所であって、読者の同意をうるにちがいない。マルクス以前の価値論ではリカードは最高峰。そして単純商品社会や資本主義の科学的分析を可能にしかつ搾取性格や利潤・地代の源泉を基礎づける前提となる。弁護論がリカード価値論を傷つけるのは偶然ではない。

リカードは、ブルジョア経済学の科学的頂点としての位置づけがふさわしいだけに、功績とともに、その限界も致命的でそして鮮明である。その欠陥は方法論上のものである。その一つとして、反歴史主義であり、価値形態論を展開せず、価値形態や商品形態の相異を理解せず、資本主義を永遠の社会ととりちがえてしまう。リカードの方法には量的視点への傾斜があり、これが価値や労働を一面的に論じたり、社会形態の質的意義を無視するにいたる。皮肉たっぷりに、リカードが原始時代の猟師と漁夫をして、支出労働にしたがって、ロンドン市場の計算表によって、交換させていると、マルクスは柳ゆした。リカードは、資本主義をのぞいて、ほかのどの社会も知らないのである。理論にしぼっていえば、もともとリカード理論のつまづきの石となったのは生産価格の問題である。反歴史主義の立場にたつリカードは、価値法則が生産価格の法則に転化する歴史的過程を追求せず、平均利潤が成立するもとの価格形成のメカニズムを解明しなかった。このために、どうしても必要なことは、商品生産と資本主義生産との間の差異を全面的に分析することだった。しかしこれをやらなかったリカードには、生産価格に移行する道はとざされた。マルクスによると、リカードはその『原理』第1章において、同量の資本が同一額の利潤をうけるとするような現象と価値法則との間の関係のもとにあって、思索した第一人者であって、本来、価値と価格は背離するのであるが、同一額の資本でも同一の有機的構成はないという事実と、価値法則の矛盾を、かれは述べない。それどころか、はじめから平均利潤の成立と資本家の現存を前提とし、生産費と価値を同一視してしまい、前提と価値法則の矛盾に関知しなかった。労働時間による価値

規定に、平均利潤率の存在がどれほどまでに一致するかを研究するのではなく、利潤率を当初から所与不動のものとして考えてしまうのである。マルクスはこのように評定する。

価値規定そのものから、価値と費用価格を区別する代りに、リカードはこっさりした方法で一般利潤率の現存を導入し、労働時間に依存しない影響が価値を決定するのであり、時には、この法則を破壊するというのである。価値と剰余価値が可変資本に比例して生みだされる法則を定式化したマルクスは、古典経済学がこの法則を確定しなかったものの、これを支持した。というのは、それはひとしく共通に、価値法則の一般的結果であるからだ。現象の外観にもとづいた経験に矛盾するかぎりでは、リカード学派は、矛盾を暴力的に捨象することにより、法則そのものを救おうとする。

ところで、マルクス理論の高みからいえば、リカードの欠点は、長所とともに、手にとるように明らかである。かれのさしあたりの功績は、価格形成、その発現、貨幣流通、蓄積、資本機能などの過程における、また所得の生産要因間への、対立階級間への分配における客観的経済法則、ならびにその形態に関する考え方にある。それはどういうものかといえ、リカードが経済法則を確定し、範疇を規定したのは産業勃興期であり、工場制成立時代であって、研究者に必要な統計データのない条件のもとであった。そのために多くの誤りもあるが、それにもかかわらず、資本主義の理論に新らしく果実の多いものを導入した。

リカードの進歩性はいまに至っても変化しない。だからして、弁護論があまりにもラディカルと思われるリカードの科学的見解を歪めたり水をさしたりする試策があとをたたぬのはけっして不思議ではない。シュムペータもその一人。『分析史』でリカードの方法、理論、実際の提言を検討しているが、カリケーチャ形態で評価し、リカードのもとではたんなるスミスの再説にすぎないと偉大な分析はとがを問われるが、同時に、かれは歴史的感覚にとぼしく、経済全体をとらえて分析する力なく、社会過程の規動力をハッキリさせなかった点において非難される。だがしかし、他面、ブルジョア経済学者は、現代のさまざまな自己の立場を補強すべく、古典学派の構成を利用する。たとえば、『現代経済学の主要潮流』のなかで、B. セリグマンは、マジナリズムを古典学派伝統の復興と考えて、制度学派の一人コモンズと、リカード、この二人を、後者が皮肉にも、地代取得者に属し、前者がいわゆる偶然権の所有は労働・資本に対立するといった理由をとらえて、近づけて、ここに社会的矛盾の具体的な発現をみさだめる。しかし、リカードはもとより、主観主義にも、労働・資本の限界生産力論たるマジナリズムにも無関係である。サミュエルソンがそう主張するように、ブルジョア弁護論は、経済学のなかでブルジョア科学的経済学の遺産をケインズ学派の立場を補強すべく、利用、両者の同化をはかり、内容的にはケインズの国民所得論とスミス・リカードの原理を結合したものを、新古典学派的综合と呼び、新時代の到来を宣言したのである。こうした時代であればあるほど、古典経済学と俗流経済学との峻別が大切であり、古典経済学わけても、リカードの内容を明確にするのは、疑いもなく、意義が大きい。と同時に、俗流経済学の本性を鮮明にすべく、いまいちど、次の文節がかみしめられるべきだろう。「…俗流経済学というのは、外見上の関連の範囲のみをうろつきまわって、いわば最も粗荒な諸現象の尤もらしい説明とブルジョアの自家用とのために、科学的経済学によって久しい以前

に提供された材料をたえず新たに反芻し、しかもとにかく、自己の最善の世界にかんするブルジョア的生産当事者たちの平凡で独りよがりな諸表象を体系化し、術学的にし、永遠的真理だと宣言することだけしかしない経済学のことである」（『資本論』第1巻第1章第4節）。